

ラット著
荻島早苗・末吉実栄子訳

『カンポンのガキ大将』

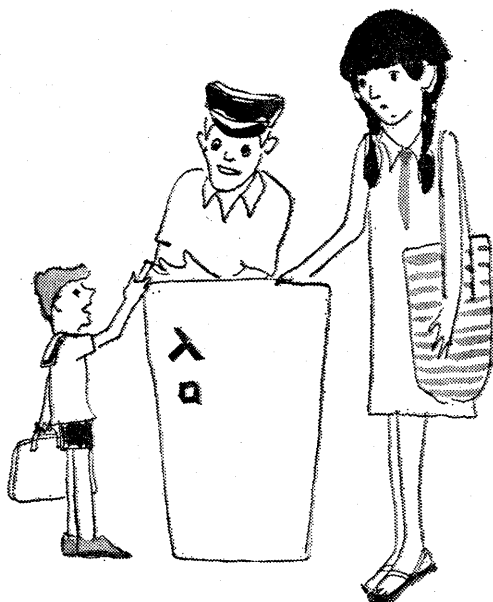
(晶文社)

近藤 伊津子

この本に初めて出会ったのは昨夏、インドネシア行を前にして、ユネスコ・アジア文化センターを訪ねた折である。隣国のマレーシアの本であるからにはインドネシアで入手できるに違いない。日本では近々、出版の予定はあるが早急に欲しいと依頼された。

そこで手に取ったのは『The Kampung boy』なる英語本であった。黒一色のタッチ、口に食み出さんばかりの沢山の大きな歯のキャラクターは極めて印象的であった。

夫の仕事について家族同行のインドネシア40日。ジャ



ワ島のバンドンに到着した日から本屋巡りをしたが、この大学街の本屋にも、主都ジャカルタでも見つけられなかった。後で聞くところによると、マレーシアの本はインドネシアにあまり輸入されていなかったということである。

ついでであるが、インドネシアでは子どものための本は少く、2〜3色刷りで厚さも薄く、日本の子どもたちにはあまり歓迎されないのではないかと思うものが多かった。色とぼしい本棚にあのエルジェの『タンタンの冒険旅行』が目を惹いた。値段も一般の家庭の収入を知ると気楽に買ってもらえるものではなさそうだった。バンドンでは子どもの本の辺りであまり子どもたちの姿を見かけなかったが、主都ジャカルタのサリーナ・デパートでは、店員ものんびりしていて、子どもたちは追ひ払われもせず、漫画のところでは立読みをしていた。実は、その子ども達の姿を見てホッとした。と言うのは、街の子ども達がのんびり遊んでいる姿をほとんど見かけたことがなく、幼い子らもちゃんと働き(収入)をしていると

も聞いたり、ハイウェイで車が渋滞すると、その車の流れの中に新聞、タバコ、キャンデーを売り歩く少年たちを知っているからである。

さて、目当ての本は、街の本屋で見つけられなかったが、夫の關係で親しくなったマレーシアの女性の天文学者から、ラットのお国での人気ぶりを聞くことが出来た。国民的人気のある漫画家であると。そして結局、彼女が、秋に学会のため来日した折に、やっと手にすることが出来た。英語版であった。

ページを捲りながら彼女の解説を聞いた。まず「カンボン」の意味、ここでは、「村」「ふるさと」の意味である。

マレーシアといろんな意味で似ているインドネシアでは都心をメンテン、それに対して、はずれの方をカンボンとも言うようであった。メンテンの高級住宅の住人は軽く蔑みをただよわせてカンボンと言った。そしてジャカルタの自称カンボン住人は少し恥じらいながら、カンボンといった。そして私はその人にわが三鷹もカンボン

といった。

さてこの物語であるが、マレーシアのスズの産地（世界最大）の近くのとある村（カンボン）が舞台で、作者ラットの少年時代の自伝である。私にとっては未だ見ぬ国、マレーシアであるが、インドネシアに似ているというからには、バンドンからジャワ島を横断しインド洋に抜ける道中の村々、そびゆる椰子の林が果てしなく続くカンボンを思い浮べることが出来る。ここではゴムの林である。

この本の初めのページを捲ると、左側には父さんが赤坊を抱いている。右側には、高床式の家の板張りの寝室。小さな蚊帳が吊され産れたばかりの赤坊が寝かされている。その隣りに母さんは足に毛糸のソックスをはいて寝ている。朝の10時とはいえ、熱帯の地らしく、屋根の隙間から強い太陽光線がさし込み、木張りの床には丸い日の輪がいくつもできていく。

生後45日目の「剃髪式」に始まり、イスラム教徒の子

として通過儀礼が次々と展開されていく。小さくて外に出してもらえないラットは、屋根からもれる日の輪と戯れる。やがて外に出て歩きはじめたラットは近所のカティジャおばさんについてゴム樹液をとりに行ったり、ずの浚藻機をのぞきに行つて、母さんに追われ、それを匿ってくれるアランおじさん。日没前のマンディー川での水浴びにつれてくれた父さんは、この上もなく滑稽で、大胆である。それに母さんの作るおいしいケーキ。父さんの自転車に乗せられて月一度の町への買物。小さな市場は、決まったところに、きまった品物と、きまった人がいる。ラットはかき氷を買ってもらう。とてもうれしそうなラット。

帰りの道では、踏切りでカンボンを無視して疾風のよりに走る汽車をながめる。

こうして、ラットはスズの産地近くの経済的にもわりあいに恵まれた村で、人情あふれる隣り近所の人々と、愛情豊かな敬虔なイスラム教徒の両親に囲まれ平穩に育つていった。この物語にはラットの止むことのない旺盛

な好奇心と父親譲りの大胆な、滑稽な呼吸はすみずみまで流れている。

やがて学齡を迎え、小学校に入る前に、コーラン塾に入る。これはイスラム教徒として教典「コーラン」の押韻形文をきちんと唱えられるよう学ぶ私塾である。おこわ一杯、\$1、小さなムチ、昔からの仕来りに従い父さんは、先生に渡すことで入学が決る。先生は大きなムチを打ち鳴らして居眠りをする塾生たちをとび上らせる。

この塾で遊びの天才少年、メオール三兄弟に出会う。そしてラット少年はこの兄弟に依って、さらに自由に生きる喜びを知り、遊びに磨きをかける。

川での釣り、泳ぎ、魚のしかけ、魚のつかみとり……川の中も外も全てを知っているような三兄弟の鮮やかな身のこなし。いつしか、ラットも同化していく。21ページにも及ぶこのメオール兄弟との交流、自然の中で熱中しきっているさまは、この物語の圧巻である。私はふと、河合雅雄の『少年動物誌』と重ねてしまった。

歯がびっしりと前に出て顔中口だらけは、この三兄弟

のためのキャラクターであると思う。思えばインドネシア、マレーシアのワヤンの登場人物にもこういう面があったようであるが、これはある典型を示すものなのかもしれない。(作者はオリジナルと言っている。)

ラットは小学校に入ったのであるが、学校に、学友達に同化出来ない淋しさはますます三兄弟との交流を深めていく。鮮やかな遊びの場面があればあるほどに、学校へ囚われの身となり時をすごしているラットの消沈ぶりが伝わってくる。

その間に、従兄の結婚式があったり、そして、イスラム教徒の男子の慣習の一つの割礼が行われる。インドネシアの農村で、まぎれ混んでの割礼の祝宴。その間、ずっと泣いていた愛らしい少年の顔を思い出す。様子はかなり違うが、子どもの成長を村あげて祝うものであるのは同じである。

輝くようなラットの少年期にやがて陰りがみえて来た。

きつかけは、ラットが幼い頃から好寄心を抱き続け、禁じられていたスズ浚渫機に近づき、スズさらいをし、得意満面、そこに父親から思いがけなくも激怒されるといふ事件である。

父さんのゴム園につれて行かれ、父さんを継ぐ大人になることを知らされる。少年はゴム園に入り、ナタを手にして初めて自分の土地を踏みしめ戦慄する。

そして、中学受験、家から離れての地の中学進学。少年期の別れは少年を育てくれたカンポン、ふるさととの別離でもあった。やがては、ラットの家族はゴム園をスズ会社に手離し都会に出ようともしている。カンポンを工業化が侵蝕しやがては消滅していくことを暗示し、この物語は終るのである。

マレーシアの豊かな農村、きびしいがやさしくもある母、滑稽なほど愉快な父、つまりは申し分のないモスラムの両親。モスラムの子どもとしての通過儀礼が次々に紹介されるのも興味深い。

前半の明るさに目を見張るばかりであった故に少年の旅立ちの悲しみ、再び見みゆることないふるさとへの限りない郷愁が、ずっしりと重く伝わってくる。

この物語は、それだけに止まったものではない。自然の中で遊びの奔流に身を任せる少年の、小学校での漠然とした不安は既に少年の日々のくらしを少しずつ侵蝕して、やがて、一挙に物語の終りに連がっていく。カンポンの自然と住人は近代化にいや応なく侵されていく。少年自身が「学校」に入るために、もう一つはここは、ぼくの土地だ！と父のゴム園を自分のものになると自覚したときと同時にその地を永遠に手放すことになることで。

カンポン（ふるさと）との二重の別れであった。もう一つは、少年が親から譲り受けるはずのものは、他者に渡り、全く別の方法で、別の土地で生きていくというところに現代の不安が現われている物語でもあるとも思われた。

(かっこう文庫主宰)